賀戰捷之新春併而謝皇軍之奮鬪

朝鮮水産開發株式會社
專務取締役 相澤毅
京城

京城府太平通一ノ二五
朝鮮製錬株式會社

朝鮮無煙炭株式會社

京城府本町一ノ五三
朝鮮煉炭株式會社
電話本局(2)一四〇五・五二六八

京城府漢江通拾五番地ノ壹
朝鮮製氷株式會社
本社 電話龍山 一六五四・一六八七

朝鮮協同油脂株式會社
社長 大島良士

朝鮮金融組合聯合會

朝鮮火災海上保險株式會社
社長 石川登盛

京城府南米倉町二二三
朝鮮魚糧株式會社
社長 長久伊勢吉
電話本局(2)二三四二番

日本水産株式會社
朝鮮支店

京城府竹添町二丁目九拾番地
日本産金振興株式會社
朝鮮支社
副社長 草間秀雄
支社長 阿部千一

京城府長谷川町七拾五番地(近澤ビルデング三階)
日産化學工業株式會社
京城營業所

京城府蓬萊町一丁目一〇三
京仁トラック株式會社
電話本局 三七五三・五四一七番

東滿洲産業株式會社
京城事務所

株式會社
關東機械工作所
京城府明治町一丁目

株式會社
昭和工作所
京城府明治町一丁目

株式會社
住友本社朝鮮鑛業所
京城府南大門通四丁目六拾九番地

日本油脂株式會社朝鮮支店
朝鮮油脂株式會社
社長 松本伊織

京城府黃金町一丁目
國産自動車工業株式會社
社長 高橋省三

京城府堅志町一一一
大同鑛業株式會社
社長 李鍾萬

京春鐵道株式會社
牛島省三
鹽川濟吉

京城府南大門通二丁目二十三番地ノ一
金剛特種鑛山株式會社
電話本局(2)二六六六番
電話本局(2)四二二二番

朝鮮林業開發株式會社
社長 矢島杉造
理事 伊藤重次郎
理事 足立利夫
理事 小林準一郎

朝鮮運送株式會社
社長 村上義一
專務取締役 河合治三郎

金剛山電氣鐵道株式會社

三菱鑛業株式會社
朝鮮鑛業所
京城府黃金町一丁目一八〇番地
(朝鮮ビル二階)

京城府北米倉町九拾參番地
鮮滿拓殖株式會社
總裁 二宮治重
理事 渡邊豐日子
同 堤永市
同 木村通
同 岡田猛馬
監事 渡邊得司郎
同 高元勳

京城府竹添町二ノ七〇
親和企業株式會社
親和鑛業株式會社
電話光化門(3)二六六一・二九八七

南鮮合同電氣株式會社

京城府南大門通二丁目一番地
株式會社 岩井商店
京城出張所
電話本局(2)一九三四・三四四五番

京城府太平通一ノ一九
朝鮮電力株式會社

株式會社朝鮮取引所
理事長 荒井初太郎
理事長代理 小杉謹八
常務理事 秋山滿夫

資本金 五百萬圓
無盡契約高 八千萬圓
京城府永樂町二丁目二五
朝鮮中央無盡株式會社
代表電話本局七一二一番
支店 京城、仁川、開城、水原
出張所 春川、鐵原、江陵、原州

京城府竹添町一ノ一七
大昌産業株式會社
社長 崔昌學

賀戰捷之新春併而謝皇軍之奮鬪

竹下平三郎
亀田喜三郎
宋文憲
矢野桃郎
金秉泰
小島光彦
渡植彦太郎
孔聖學
張憲根
李聖根
富山修
長濱能得
袁榮春
増田道義
山本竣太郎
大西孫三郎
馬場五郎
岩城彌太郎
山本義一郎
上田勝
佐藤德重

朝鮮の皆樣へ

一枚の繪葉書

高杉早苗
(松竹大船撮影所)

今朝のファン・メイルの中に、私は偶然朝鮮の方からの繪葉書を發見して、大陸的な威容といつた風なものをそゞろ感じ、長い間憬れてゐた風物に接した思ひを味つた。

シューマンハインクだつたか、リリイ・ポンスだつたか、今はつきり思ひ出すことは出來ないが、ある泰西の著名な歌姫が、自分の旅行した先々の繪葉書や、また見も知らぬ土地の風景寫眞を、その勉強室にはつて、自然に接し得ない多忙な自己を、そこで慰やすと聞いてゐる。何への當なしに打ち棄てられる一枚の繪葉書にも、鋭い感受性の選ばれた藝術家は、そこに壯な自然を發見して、自己の內面的な[?]の湧出する糧としてゐるのである。私にはまだそれだけのたくましい想像力と、鋭い感受性が乏しいが、不思議と一度も行つたこともない風景寫眞に心惹かれ、大切に保存してゐる。ブロマイド請求の、お座なりのファン・レターには飽き〳〵してゐるが、かうした美しい繪葉書に接すること、贈つて下された方の人柄を想像されて、何かなしに心樂しいものがある。

朝鮮——といつたところで、近代の交通文明は、距離を非常に短縮し、行かうと思へば半日の中にも行けるところだ。しかし、私は藝者の女かも知れないが、やはりそこに行き着くまでの山川を越へ遙に遠いものと思ふところに、何故とも知らぬ樂しさを感じる。この樂しさは旅行く樂しさではない。やはり距離感の嬉しさだ。遠くはなれてゐる樂しさだ。遠くはなればなれにゐて、その遠さを想像する樂しさである。その意味で、今朝のこのファン・メイルは私に樂しい。金剛山の威容は、いろ〳〵な寫眞映畫で知つてゐるが、この拙かぬ繪葉書で見るのは、また何とも云へぬ美しさだ。私はそこに去來する雲の流れを勝手に想像し、せゝらぎの響きへ勝手に聽くことが出來るからだ。白と黒との寫眞面に、いろ〳〵な色を想像することによつて、私の樂しさは更に倍加する。

私はこの一枚の繪葉書を前にして、何か聲に出して叫したくなつた。リリイ・ポンスの[?]たる內容は、かうした自然を繪葉書に見て、メトロポリタン・オペラハウスで堂々歌ひ得る雄渾な[?]をしてゐるのではないかとさへ、私は妄想をたくましくするのである。最近私は西洋舞踊に興味を失ひ、日本舞踊に關心を持ち出すと同時に、いゝ唄に[?]みな日本の小唄に興味を持ち出して來てゐる。小唄といつても、近頃流行のジャズ小唄やヘア調の小唄ではない。古くからある小唄である。これは私がだん〳〵年齢をとつて來た證據だと、母に笑はれるが、私はさうは思つてゐない。古くからある唄の中に、たくましい藝術を感得することが出來るからだ。

へ青柳の、かげにたれやらゐるわいな、人ちやこぞえせん、おぼろ月夜の、影法師

しみ〴〵した、さびと艶なそゞろに感じる。

へ遠くとも、[?]き流れの、かきつばた、飛んで往來の、籬を、覗いて來たか、濡れつばめ、顔が見たらば、ないかいな

へ秋の夜は、長いものとは、すんまゐな、月見ぬ人の、心かも、更けて待てども、來ぬ人の、訪づるものは、鐘ばかり、かぞふる指も、寢つ起きつ、わしや照らされてゐるわいな

口ずさんでゐる中に、優雅な江戸情緒を感じさせるのである。近代的風景藝術家に、江戸小唄を口ずさむなんて、私はエキセントリックな自分の感情の動きに驚かされるが、自然に對する感情の持ち方は古人も近代人も變りはないと信じる。

私達、特にせはしい女優稼業なとしてゐると、殆ど暇がなく、撮影の休みは寢るより外に手はない、ただ眠い、眠くてしようがない、しかし、肉體的疲勞に眠つて醫し得ても、心をまで醫やすことは出來ない。そんな時に、たつた一枚の繪葉書をファン・メイルの中に見出すことは、心樂しいものだ。それがなかなか行かれない、遠い風景であつたりすると、なほのこと樂しいのだ。

私は撮影所から逃げ出て陽のあたる緣側に坐り、亡父が愛誦した端唄を口ずさむ

いざさらば、紅葉狩

へあれ見やしやんせ、海晏寺、品川や、高輪も、及びなき

この小唄から北國の大きな城下町と、しつとりした山々を想像することが出來る。私は今年、小唄をもつと〳〵勉強しようと思ふ。それにつけても、今朝の、この朝鮮の一枚の繪葉書に感謝したい。

朝鮮の友よ！お懐かしい、元氣で新春を迎へられたと信じます

"朝鮮の清正"

中村吉右衛門

客年朝鮮、滿洲地方の皇軍及び[?]將士諸君の御慰問かた〴〵同地を巡業いたしましたことは、私の一生に取りまして忘れることの出來ぬ思ひ出の一つでございます。つきましては、その時の感想を今般京城日報紙上を通して述べさせて頂きますことは、誠に私の光榮と存じます。

滞在一週間の短日時ではございましたが、京城に參りまして、朝鮮神宮を參拜させて頂きましてから、第一に私の眼に映じましたことは、著しい發展振りと、[?]されて居りますことで、これには驚くの外はございませんでした。內地人だとか半島人だとかいふ隔た感じは少しもなく、殊に南總督閣下の思召によりまして、九月廿四日、半島青年團の發團式を親しく拜見いたしまして、いやが上にも心強く思ひました。

また半島の人達が、內地の人達と樂しく建設の仕事にいそしんでゐられるのをお見受けいたしまして眞に美しいことゝ嬉しく感じました。その外、私の爲めに御盡力し且つ御後援下さいました皆様の御親切、之は忘れることは出來ません。

半島に於ける清正公の遺蹟なども色々伺ひました。今後朝鮮へ參ります機會がございます場合は、是非『朝鮮の清正』とでも申しませうか、[?]をもつて演じてみたいと、唯今からそれを樂しみに致して居ります。

甚だ烏滸がましい申分ではございますが、內地人はひとしく半島へ渡つて、現狀を見且つ聞き、より以上の認識を深めねばならないと痛感いたしました。

買へなかつた木鉢

朝鮮での想ひ出から

市川猿之助

朝鮮へ參りましたのは一昨年が初めてでした。公演の傍ら見物するのですから、豫定の半分も見ることは出來ませんでしたが、それだけ寸暇を惜しんで實によく歩きました。先づ朝鮮の土を踏んで一番最初に感歎させられたのは汽車の立派で感じの良いことでした。私は釜山から京城までしか乘りませんでしたが、內地と違ひ廣軌ですし、何となく大陸的な氣分がして嬉しくなりました。何といひませうか——大陸の拍打ちといつたものを感じさせられるのです。氣持のよかつたことは朝鮮を旅した

…金剛山へ行きますと、料理の美味しいことは勿論ですが、それよりお汁を、一度も二度もサーヴイスしてくれるのは有難かつたです。料理もフランス風の取分け料理でしたが、朝鮮へ行つてこんな氣持よい汽車の旅が出來やうとは全く想像も出來ませんでした。京城へ參りますと土地の有力者の御案內で李王家を拜見することが出來ましたが李王家の秘苑の立派さには驚きました。齢老びた松の大樹の上に鶴の巢などあり、鶴が悠々とその邊りを飛び廻つてゐるかと思ふと、古代朝鮮風の亭あり、池あり、規模必ずしも雄大ならずとも、その配置の妙は小さい流すら飛瀑三千丈と形容したくなる程の趣きがあるのです、その時李王家の博物館にも御案內を受け、珍しい佛像や陶磁の類を拜觀し得ましたが、その美術なことは驚嘆の外で好事家にとつては、これこそ垂涎措く能はざるものだと思ひました。また食べ物の話で恐縮ですが朝鮮の漬物の美味なことも忘られぬ旅の思ひ出になつて居ります。あれは到底內地では眞似の出來ないものらしく、私も歸京してから大きな瓶に朝鮮風の漬物を作つてみましたが、どうもあちらで頂いた程美味しくないんです。今度行つたら何としてもあの秘訣を傳授して貰ひたいと思つてゐます、朝鮮の風景もあの南畫に見るやうな枯淡な味は內地にない魅惑でした、車中窓外に見る小高い山々にも南畫に見るやうな景色はないが何處となくどつしりと落着いた大陸的な味はひがあるのです、あゝした風景は滿洲でも見られぬやうに思ひます、あちらの人が親切で鷹揚なところのあるのは確にかうした環境が影響してゐるのではないでせうか、いざ歸るといふ時、物珍らしさから隨分いろ〳〵な土産物を買ひ集めましたが今日でも絶對に朝鮮のものでなければいけないと信じてゐるのは蚊帳です。薄くて風通しがよく非常に良いものです。麻の質が違ふのでせうか、昨年の夏など一すべて自慢でした。それから珍らしい物では朝鮮の木鉢です、あれは米を搗ぐものださうで、內部の周圍には螺旋狀の溝があり、水を注ぐのに都合よくなつてゐますが、私の見たのはもう大分使ひ古したもので、割れ目にカスガイなど打つてあり、その骨董的な味は何ともいへぬものがあるんです、そこで、それを讓つて貰はふと、持合せの金を出して頼んだ譯です、所が、どう感違ひしたものか、どうしても讓つてくれないんです、新しく買つても八十錢位だとか聞いてゐましたから、やつと無理に頼んで讓り受け、二三丁はどやつて來ると、誰か追ひかけて來るので、振返つてみると先刻の木鉢の持主なんです、何事だと聞いてみると、どう考へても讓りたくないから、先刻買つた木鉢を返してくれとかういふんです、さうまで手放したがらないものをそれ以上無理に頼む譯にも行かぬので仕方なく私も斷念することにすると、先方はちやんと金を返して寄越しました、いまに、どうしてあんなに相手が木鉢一つ返り惜んだか、いくら考へてもその氣持が判らないのです、慾張な獸い奴とでも思つたのでせう、これは朝鮮旅行中たつた一度の失敗でした

先日は青春[?]岡君が行つて大變歡迎されたといつて大變喜んでゐましたが、私も機會さへあれば二度でも三度でも行きたい土地だと思つてゐます、日滿支一體結びが愈々固くなりました今日、私どもにも朝鮮の重要さは判ります、朝鮮はこれから非常に發展の途に入るのでせうから、私ども藝術の上で何等かのお手助けをしなければなりません、機會さへあれば何度でも行きたいと思つて居ります

元旦試筆

井上正夫

京城のお孃樣が語る 私のお正月

(二) 陰暦を廢して

京城帝國大學講師李甲[?]氏令孃　李相梅さん談

子供時代にはお正月の訪れ程嬉しかつたことはございませんでした、きれいな着物、珍らしい御馳走をいただくこと、父や母につれられて方々へお年始廻りに行く樂しさ、十二月の始めになつたばかりでほんとにお正月が待ちきれない程でしたが、しかしこの頃は子供のころほどではございません、一年々々と乙女時代から自分が遠ざかつてしまふやうで淋しい氣持が致します、昔の因習を破つて新しい道をひらいて行くこと、これはなか〳〵のことで

去年までも私共のお正月は二つ式になつてゐました、つまりお正月に行はれる祖先のお祭りは陰暦のお正月で、お客樣の御招待は陽暦のお正月といつて不經濟千萬なことをやつて參りました、でも今年からは斷然陽暦のお正月に祖先のお祭りも行ひます、今まで私共の祖先から傳つて來た美風はそのまゝ維持してゆきます、そして改良すべき數々は躊躇せずに改良して行き、一歩々々新時代に相應した生活を築いて行く——これが今度のお正月からの私の目標であると申しませうか

賀戰捷之新春 併而謝皇軍之奮鬪

京城府元町一丁目〇四一 朝鮮□□綿株式會社

京城左官業組合

京城本町二丁目 友井尙文堂 電話本局一五六九

京城本町三丁目 橋詰庄太郎

京城府蛤町三一 米倉元一

京城府太平通二丁目 寶諸彌七

朝日海上火災京城支部 高橋伊平

朝鮮公論社 里吉基樹

京城南大門前 根木久作

京城府岡崎町九二番地 合資會社 龍山精米所 電龍一五〇九番

京城府北米倉町九三 黑野電氣工務所 電本一九六二

京城穀物商組合

京城 野田董吉

京城府本町三丁目 三越 土出松音堂

京城府南大門通五丁目拾九 發動機製造株式會社 京城出張所

京城府黃金町一丁目 泰明商會 京城出張所 電本三三〇一

京城府本町三丁目 阿部藥房 電本四八七・四二六六

京城府長谷川町二ノ一富士ビル 朝鮮中央揮發油販賣同業組合 電話本局七六七〇番

株式會社 橋口金物店 取締役社長 橋口重光

京城府西小門町四十二番地 株式會社 藤澤友吉商店 京城支店

京城府南大門通り三ノ九三 食糧品問屋 株式會社 吉川商店

帝國製麻株式會社 帝國製絲株式會社 朝鮮專屬販賣部 愛國商行 京城府黃金町二丁目 電話本局(2)三九〇四番

京城府長谷川町七四 合名會社 近澤商店 電話代表番號本局六一九一

京城府長谷川町百十二番地ノ二十 京城不動産株式會社

京城府南大門通り三ノ一〇六 日本紙業會社 京城支店

京城府鍾路一丁目三十六番地 横濱火災海上保險會社 京城支店

朝鮮郵船株式會社

東洋オフセット印刷株式會社 京城府太平通二丁目二番地

京城府北米倉町一三六 岡田勝寫堂 京城支店 岡田繁二

京城南大門 中央物産株式會社 電話本局二〇五六番

二株敬組合長 曹重煥

金海邑 慶南自動車株式會社 金海營業所 電話五番

慶南 金海朝鮮酒々造組合 組合長 □上甲 理事 李□□

金海郵便所長 井上三之介

進永郵便所長 石井直

金海角一山林土地株式會社 市原助治

駕洛面議員 金成鶴

進永驛前 青柳種吉

慶南道會議員 植田義夫

下東穀物商 金華圭

進永驛前 福本旅館 電話七番

福林社酒類製造業 李晋馹　茂溪里 李宗林　竹林里 宮本崇一　松亭里 坂本平太郎

金海邑長 駒宮庄三郎　〃副邑長 文呂逢　駕洛面長 裵鍾澤　大渚面長 高光烈　長有面長 河奉化　進永面長 金潤奭　二北面長 崔普宗　菉山面長 李雨英

菉山面有志 曹秉謙

金海邑會議員 朴源達

金海郡米穀統制組合 組合長 吳斗煥　主事 遠藤圭稅　同 李孝根　書記 朴二冠

南山醫院 院長 金□勳 電話四〇番

釜山府水晶町 朝鮮精米株式會社 電話特一八二九番

釜山府會議員 白石馬太郎 釜山府幸町一九五〇 電話牧島二二二番

釜山府富平町五九二 外科皮膚科 李瑾鎔醫院

慶尚南道水産會

慶尚南道漁業組合聯合會

釜山陶滋器商組合

淺野セメント株式會社 日本セメント株式會社 土木組 左官材料 和田商店 和田商店 釜山府大橋通

釜山府大橋通一 朝鮮米穀倉庫株式會社 釜山支店

釜山驛前 荒井旅館

釜山鐵道事務所 高野了三

朝鮮釜山府榮町三丁目 株式會社 佐藤商會 釜山支店

釜山府大橋通一 株式會社 朝日組支店 代表電話特一三三三番

釜山遞信分掌局長 釜山郵便局長 宮原猪一郎

釜山府大倉町三 株式會社 澤山兄弟商會 代表電話特四〇八番

釜山府會議員 矢坂一人 釜山府大新町九五

釜山府會議員 金相洪 釜山府草梁町一〇五七

釜山府會議員 倉地哲 釜山府土城町一ノ三

釜山府會議員 久布白貫一 釜山府富民町一六三〇

釜山府會議員 原武一 釜山府土城町二ノ一

辻靜一 釜山府大倉町四ノ四〇

慶尚南道 産業組合協會

櫻庭藤夫

內務局 釜山土木出張所 職員一同

釜山商工會議所會頭 釜山府會議員 中村高次

朝鮮商船株式會社

釜山第一棧橋構內 釜山棧橋食堂

釜山府大倉町四 大森文次

慶南梁山郡廳

釜山府大新町 釜山放送局

釜山刑務所 職員一同

牧之島工友會

釜山青果株式會社 電話特一〇四番

釜山府大倉町四ノ三 株式會社 釜山商船組

朝鮮汽船株式會社社長 釜山商工會議所副會頭 山田勝 釜山府土城町一ノ五 電話特一四五四番

釜山淸酒々造組合

釜山綠町貸座敷組合

朝鮮釜山府大橋通一丁目拾参番地 朝鮮汽船株式會社 代表電話四〇〇一番

南鮮燒酎親和會 醸造元 釜山 大鮮醸造株式會社　釜山 增永醸造所　馬山 昭和酒類株式會社　發賣元 三井物産株式會社

釜山府本町貳丁目拾番地ノ壹 釜山原鹽販賣組合

フォード特約販賣店 釜山府榮町一丁目四十一番地 朝鮮自動車販賣株式會社

慶尚南道産業部

釜山府本町二 迫間本店 電話特三二五番

釜山榮町一丁目四十一番地 慶南自動車株式會社 電話特五七六番

釜山府榮町三ノ一九 合資會社 小宮黑鉛鑛業所 電話特七一九番

釜山石炭商組合

釜山鐵道醫務室 草梁病院

釜山大倉町 釜山海運業組合

釜山府本町三 諸紙問屋 合資會社 萩野商店 電話特三〇番

釜山府凡一町一二九〇 三和護謨株式會社 代表電話特二九〇番

釜山化粧品商組合

釜山府會議員 山內忠市

釜山無盡株式會社

朝鮮殖産銀行釜山支店 職員一同

日本ペイント 和田商會

岡田福三郎

慶南梁山産業組合

滿留産商會

慶南梁山郡梁山面 梁山金融組合

坂田文吉

加藤襄

睦順九

鈴木敏

今井莊重

池田佐忠 釜山府昭和通三 電話特七四七番

朝鮮金融組合聯合會 慶尚南道支部 慶尚南道各金融組合

社團法人 釜山銀行集會所

釜山府

釜山鐵道改良事務所長 轟謙次郎

釜山西部酒造株式會社 蓬莱酒造株式會社 釜山鎭酒造株式會社 牧島酒造株式會社

釜山府大廳町二 田尻 大沼 公證役場 電話特九五五番

釜山刑務所長 兵頭傳 外職員一同

釜山府凡一町七〇〇 朝鮮紡織株式會社 代表電話特四〇〇五番

船舶艦艇ノ建造並修理 汽機汽罐ディーゼル機關ノ製造 タンク橋梁其他一般鐵構物ノ製造 朝鮮重工業株式會社 社長 森辨治郎 專務取締役 阿部梧一

大阪地方遞信局 釜山出張所

釜山府大新町 手島近江

合資 中島商店 釜山出張所

株式會社 倉橋商店

鮮一紙物株式會社 釜山支店

李榮彦

石山五郎

慶尚南道廳 第一食堂員一同

釜山水産株式會社

釜山府大廳町二 香椎源太郎 電話特一〇一〇番

南鮮合同電氣株式會社 釜山支店

釜山府本町 株式會社 立石商店 代表電話特四〇〇七番

漫談　僕の珍友傳

サトウハチロー

世間には隨分變りものが居る。と言つたら、いや、君の友達には特に變りものが多いんだよ、と言つた人があるが、隨分失禮な話である。類は友を呼ぶ、眼の高き處には玉なんて言ふ諺が本當だとすると、それぢやまるで僕が變りものみたいぢやないか。失禮な！

で、僕が變りものだと思ふ人物を、此處で公開し、大方諸賢の御批判を仰がうと思ふ。

×　×　×

先づA君だが、どうもA君なんて言ふと、小學校の時、散々苦勞した旅人算みたいで嫌だけれど、何分今は飛ぶ鳥落す某製藥會社の偉い人だから、A君で我慢して貰ふ事にする。

この仁が未だ志を得ざる頃、某製藥會社につとめて居た。賦々の觸をやるのは誰しも同じだと見え都の東北の方角に夜な夜な通つて居た。（お前もさうだらうなんて言つちや困る）

或る雨の夕方、傘をさして、例によつて例の如く、ぶらついて居ると、あつちこつちから、

「○○製藥の旦那、○○製藥の旦那」

と呼びかける。

「おやツ、社のやつで名の賣れたのが居るのかな」と、あたりを見廻すと、どうも自分らしい。不思議な事もあるものよな、と考へるうちに、ハッと氣が附いた。呼ぶはづさ、社名入りの番傘をさして歩いて居るんぢやないか。

さて、諸君。ここで傘を閉ぢて小ぬか雨に濡れて走つたり、又はあつかましく、そんな者共は對手とせずと言ふ樣な顔をして、社名を廣告して歩く樣なA君だつたら僕はここに推獎はしない。

ではA君はどうしたのか？彼はクルリクルリと傘を廻し乍ら悠然と歩きつづけたのである。なんとこれなら濡れず、讀めず、てれずの三拍子でせうがな。

×　×　×

次はB君だが、この位貯蓄心に富んだ男は先づ見た事がない。郵便貯金の通帳を肌身離さず持つて居て、何かと金がはいると郵便局へ直行する。

いゝ事には違ひないんだが、こん晩は何を喰はうと、友達が頭をあつめて居る時でも、知らん顔をして帳面を樂しんで居るのである。何を食はうと言ふのは、天どんにしやうか、ビフテキにしやうか、それとも鰻の中串を、なんて言ふ低級趣味なお話ではない。うどん玉を生醤油でゴマ化さうかと言ふ、せつぱつまつた食物のはなしなのである。

その恨み骨髓に徹した友達の一人が、ある時、どこに通帳をしまつて居るかと、色々探したけれど見つからない。（探したのは僕ぢやないですぞ）

一緒に風呂に行つても別に腹巻もして居ない。B君が男である以上、身體に貼ひをかけるわけにも行かない。（紙上中止！）

ところが、この謎が偶然にどける時が來た。金がはいつたので、はるばると言つても房州は館山なんだか、海水浴に出掛けたのである。

今みたいに朝から晩までブンブン飛行機が飛んで居ない時代で、物價もやすかつた。

大いに大盡氣分を滿喫し、釣船なんか出して釣つたり飲んだりしてゐるうちに、空は曇いし、波はおだやかだし、泳ぎたくなつて來た。

「ドブン」と、一人が飛び込むと我も我もとつゞいて飛び込んだ。

かうなれば、釣なんか出來やしない。B君も着物をかなぐり棄てて飛込んだ。

が、次の瞬間

「大變だッ！しまつたッ！」

とB君が、地球最後の日の樣な叫びを上げたのである。さては足でもつつたのかと、人一倍友情に厚い（誰だ笑ふのは？）僕は、拔手を切つて泳ぎ寄つた。

その頃は未だクロールが流行つて居なかつたんだから仕方がない。

さて、そばまで行くと、B君は滅多矢鱈に水をはね散らして船によぢのぼる處だ。

「おい、どうした、足でもつつたのかい」

と言ふと、B君はサル又をほどき乍らベソをかいてゐる。

「通帳を濡らつしやつたい」

僕も色々なものを見て知つて居るが、ポケットのついたサル又ははじめて見た。

B君はサル又に特別のポケットをつけて通帳を入れて歩いて居たのである。

×　×　×

C君は、有名なチエリストであるドイツ生れの夫人を持つて居る。チエリストと言つたら、ハハアンとおわかりになる事と思ふが。

さて、C君位あわて者はないと言ふ事も樂壇では定評になつて居るが、その一端を御披露しよう。

C君が食事をしようと思ひ、銀座のアジアイスにはいつて行くと舊友の某氏が居る。

「やあ、しばらく、しばらくだつたなあ」まではなんでもない、型通りあたり前だが、その次がどうかと思ふ。

「こゝ今度は何日分はら」

何を言つとる！今、逢つたばつかりぢやないか。

それからまだある、某氏は恰度食事が終つた處なので立ち上るとC君もソクサと帽子をつかんで

「か、歸るのか、ぼ、僕も一緒にそこまで行から」

と言つて出口まで來て氣がついたのである。

「いや、ぼ、僕は飯だ飯だ。未だ食つてないや。」

と、泡を食つて、又内部へはいつて行つたものである。

C君は江戸ッ子だからべらんめいで話す。夫人はべらんめい語が學問だと思つて、やつぱりべらんめいで話すから、とても可笑しいのである。

ドイツから來て、半年ばかり經つた、或る日C君の親友の某テナーが訪問して來てた。

「奥さん、お淋しいでせう」

と言ふと、C夫人はニッコリ笑つて言つた

「近頃はもう慣れたから淋しくはねえが、時々は、故國の味なんかに會ひてえわ」

×

D君ぐらゐ鰻の好きな人は居ない。

冬はタンポポの咲く頃から、秋は菊の花が萎枯れる頃まで、宿に居る限り、鰻である。

しかも完全な裸體主義者だから、林檎の味を知る以前の、アダム、イヴと全然同じ意味の鰻なのである。

だから鰻の使ひ方なんか堂に入つたもので、アチラのナイト・クラブやボードヴィルでやるファン・ダンスなんてものは、D君を手本にしてゐるんぢやないかと思ふくらゐである。

肥つてるから自然オックウなのか、あまり旅行には出掛けないが、或る時、頼まれて某温泉地に講演に行つた。

ちなみにいふが、D君は土俵家なのである。

旅館につき、部屋に落付くと、早速鰻になつた。部屋に居るうちはいゝが、そのまゝ、ブラ／＼と廊下など歩くから、女中なんかは嫌な顔を作つて「キャーッ」と叫んだりして走つて行く。

間もなく番頭がもみ手をしてやつて來た。

「へえ、どうも、そのなんでして、えーと、全くのお願では、どうもへえ、何か着けて頂きませんと、その、警察がやかましう御座いましてね。」

「あゝ、さうかい。何かつけりやいいんだね」

と部屋にとつて返したD君が、ニコニコし乍ら出て來た。

驚いたね、まつたく。D君は鰻で帽子を冠つて居るではないか。（了）

落語　七福神

三遊亭圓左

七福神と申すお芽出度御咲ひを申し上げます

「どうした居るかえ、オイ金前金公」

「だれだ金前だの金公と言ふは」

「俺だよ聲でわかりさうなものだナ」

「妙な聲だナ、ウム赤い聲だナ、わかつた八公だナ」

「漸くわかつたナ、一人かえ」

と言ひつつ上つた大工の八さんは朋友の金太の前に坐つて

「サア發揮しろ」

「何を言ふンだ、めづらしいナ物を潰て」

「今日は正月の元日だらう、ソコで年始に來たよ、さてはや一夜明けまして御目出度存じます」

「感心々々さう言ふとどうやら人間らしいナ、どうぞ相變らず御贔屓ひ申します」

「イヤ感心々々お前も人間らしいナ」

「生意氣な事を言ふナ」

「時にお前一人か山の神はどうした」

「噂ナか、子供をつれて神詣りに出かけたよ、今年は西北が惠方だから鞍馬を拜かるやうにと明神様へ出かけた」

「さうか、一人では退屈するだらう」

「イヤ退屈もしねえ、發句を考へてゐるからナ」

「ウンさうだのお前は初雪やなんと言ふ都々一が好きだからナ」

「都々一ちやアない發句なんだ、都々一は廿七文字發句は十七文字でわかるやうにしてある、元日やまだちらほらと去年の人、どうだ佳い句ちやねえか、元日やまだ地を踏ぬ鳥の聲、どうだわかつたか」

「成程面白いね、ウム尤もだ、覚以てあんぷくいたしたね」

「なんだそのあんぷくとは」

「感心した事ちやねえか」

「それは感服だ」

「ア、感服かえ、オイ兄きそのヘコの間に絵と字を書いたビラが下つてゐるナ」

「ヘコの間ちやアねえ床の間だ、またあれは狩野風で間は老松に日の出だ」

「成程松に日の出か、上に字が書いてあるナ」

「あれは賛だ」

「ヘー三かえ、三にしては字が多いぜ」

「馬鹿ッ、此の絵をほめて書いたものが賛だ」

「ヘーさう言ふものかね」

「コンナ事は子供でも知つてゐる、それを知らねえと笑はれるぜ」

「成程、絵の上に書いてある字は三か、左様なら」

「オイ待ちナ、今日は正月の元日だ、屠蘇でも祝つてくれ」

「有難いが後來るよ」

八さんは飛出したが

「金公は物識だナ、繪の上に書いてあるは三と言ふ事を知つてゐるとは、是から山田さんの所へ行つて掛物をほめてやらう」

八さんは御懇意の山田さんの所へ來ました

「御免なさいまし」

八さんはそれへ上ると山田先生が

「御病氣かナ」

「イエ病氣ではございません、見せて頂くものがございまして」

「何を御覧なさるの」

「こちらにもヘコの間イエあの床の間にかけビラでなしさらく掛物がございませう」

「ハハア掛物ですか震災前までは良い物もございましたが、あの地震の時に燒きまして其後朋友や親類から貰ひましたもの許でござります」

「ソレヲ見せて頂きたいもので」

「ハハア掛物がお好きかなかなかあなたは御風雅な御人だナ、御目にかけるやうな物はありませんが二、三幅御覧に入れませう」

是から山田先生は掛軸を出して床にかけましたが、八さんは一生懸命ちつと目をすゑて見て居ります

「白い鳥が足を上げて水を見て居りますが」

「あれは白鷺ですよ」

「ヘエ鷺ですかえ、鷺が書いたものです」

「文鳥ですよ」

「ヘー文鳥ですか鷺の事を文鳥と言ひますか」

「それはどう言ふわけですね」

「雪が降つてゐるときは遠くの樹に止つてゐる鳥は色が黒いから一目見てわかりますが鷺の羽色は白いから雪が降つてゐては見わける事が出來ぬと言ふ事だね」

「成程、是は好い三だ」

「イヤ賛ではありませんよ、亀田鵬齋先生の詩ですよ」

「又まゐります、不思議だナ最初は三で山田先生の所では四になつた、ウム判つた、是は一首づつ上がるンだ、さて今度はどこへ行つたものか、さうだ佐野屋の隱居さんの所へ行けばきつと掛物があるね、今度は四と言つてほめてやらう」

八さんは質屋の隱居の住ひへ出て來まして

「時に御隱居さん床の間の掛物を見せておくんなさい」

「書畫が御好きか、サアどうぞ御覧下さい」

「字が書いてありますね、どうぞ讀んでください」

「神佛は佛を賞り、末世の俗は祇師を賞る、汝は五尺の身を以て、一切衆生の煩惱を照す、柳は緑花は紅のいろ／＼」

「ウムいゝ四だ」

「四ではありませんよ、是は一休禪師の語ですよ」

「エッ…五かね、隱居さんこの他に掛軸がございますか」

「サアこれを御覧なさい」

「大勢居るね、頭の長い人や痩な袍てゐる人や、袋を持つてゐる人や、鯛を抱て釣竿を持つてゐる人もあれば、米俵を踏んでゐる人は小槌を持つてゐるますね、オヤく琵琶を持つてゐる女も居るね、字が書いてありますね、へー、實に好い六だ」

「イエ、是は七福神さ」

講談　勇將と忠臣

"永井傳八郎"

悟道軒圓玉

天正十二年四月尾州小牧山の戰ひは徳川家康公が、織田信雄の爲めに出馬いたし豊臣秀吉公の率ゐる二十萬の大軍を討破り大勝利を獲た、此時徳川の家臣永井傳八郎は尾州犬山の城主にて猛將と云はれた池田勝入齋信輝を討取り家康公より感狀を賜はり武名を揚げたが、此折信輝の長男紀伊守之助と舅森武藏守も戰死いたした、次男三左衛門輝政は共に斬死にせんと馬を敵陣へ乘り入れんとしたが家臣伴大膳が必死となつて之を止めた、其時徳川の軍はさつと引揚げた、爲めに輝政は心ならずも本陣へ引揚げる、所で此の戰は媾和となつたが、輝政は父兄の仇は徳川であるいつかはこの恨みを晴らさんものと、ソコで愛する九郎三郎秋殿の一刀に徳川斬との銘を刻入れた、秀吉公この事を聞かれて輝政を諫め又家康公にも此事を申し入れ、輝政當時無事なるを幸ひに家康公の姫督姫を申し受けて輝政の内室といたしこゝで池田と徳川とは舅婿となつた、ソレで天正十九年正月年頭の祝辭かたがた婿男の對面をする爲めに備前岡山より江戸城へまゐつた、此時の取持役は井伊直政、榊原康政、本多忠勝、酒井忠次の四人、スルト輝政が

「自分の父信輝の首を擧げしは當家の臣永井傳八郎と承はる。今度當城へまゐりしが幸ひ、永井に面會いたしたい、何卒これへ御伴下さるやう、シカと申し聞いた事もござる」と云つた。

サア是を聞いて驚いたは四人、傳八郎をココへ伴れてまゐれば父の仇と眞二ツにするであらう、さりとて永井は死にましたとも云はれぬ、暫く御猶へ下さるやう、只今傳八郎病中でございますがと、かう申して、酒井忠次が家康公に此事を告げて

「如何いたしたものでございますか、傳八郎を差出しますれば助ける事はござるまい」

とかう云つて意見を問うた、家康公も是には大いに當惑いたし稍しばらく考へてゐた、永井傳八郎は我が池田三左衛門輝政の父勝入齋信輝を討取つたもの故これを差引出として呉れろと申すであらうが池田にやれば斬られてしまふ

「コリヤ酒井、三左衛門奴が傳八郎を申受けんと申したる時は斷れ」

「ヘエッ、お斷り申しまするはいと易き事にはございまするが、それが爲に御縁邊、御破談になりましては」

「仔細ないぞ、よし破談これによつて破るとも傳八郎を渡はすことはならぬ、小牧山の一戰は予と秀吉との戰ひにして、永井傳八郎と池田家の爭鬪ではないぞ、傳八郎は我が爲に敵將を討取つた者、それを父の仇なりと憾み居る三左衛門は士道を知らぬ者、假令何れば我が家の家臣を討てと云へ、何故彼が申すとも傳八郎を渡はすことはならぬ」

「立派ですな、斯らいふ人ならば忠義を盡す事が出來ますよ、骸々彼つて置いて家書一枚で斷るやうな主人では不平も言ひたくなる、又頭の一ツも撫りたくなる、家康公などは寶本家でも惜かあります」

そこで井伊、本多、酒井、榊原の四人が何時も變らぬ御主君のお慈悲有難き事と大層喜び

「左までに御決心遊ばした上は池田侯より傳八郎を差引出として贈れと申しましたる節は成度お斷りを申すでござりませう」

「予も他既ながら彼の様子を見たいであらう」

四人は御前を下つたがどうも池田侯が傳八郎を見たならば拔打に斬りさうに思はれる、差引出として寄越せなぞとは云ふまい、見たが最後ズバリと殺るであらう、少しでもその樣子が見えたならば四人で池田侯を止めて、その間に傳八郎を逃すことにしようと、これから使を遣はして、永井を招び寄せた、傳八郎はこんな危險が身に迫り居るとは少しも氣が付かない

「どういふ御用にございまするか」

と云ふと酒井忠次が

「どうも永井、飛んだことが出來たよ、氣の作用か登と跡が潮いやうだな、天庭に曇りを生じどうやら死相を現はして居る」

「これは恐れ入つた、相變すお戯れを」

「イヤ毎時の容貌とは違ふ、今日池田侯がお見えになつた」

「その儀は承知いたし居ります、目出度い事で」

「目出度くないよ、貴公に是非會ひたいと申して居る」

「左様で、會つてやりませう」

「其迦ッ、何だ會つてやりませう、面會いたさば、その首は飛ぶぞ、聞いたであらうが、池田侯は小牧山の戰ひの時にお父上が貴公に討たれてゐる、それが爲めに大層恨み居るとの事だ」

「その様な事も承はりました、併しこれは判りませんな、戰場の敵は塞平の友なりと申す古語もござります、然るに私を飽まで憾まれるとは」

「それは理窟だな、此の場合には道理なぞは通らぬよ、一體道理なぞと云ふものは下の者には通るが上には通らぬ、荒大名に道理なぞは通らない、まア出て見なさい池田侯が貴公を斬らうとした時は我々が飛びかゝつてその小手を押へる、その間に逃げてしまへ」

「左様でございますか、逃げてといたします」

「お前の苗字は永井、ゐあひを拔いて腐爛も要れ」

「是は怪しからん」

「まア／＼出て見ろ、イザと云へば逃げろ御當家は逃げ／＼天下を取つたから、それは徳川家の秘法だ、サア一緒に參れ」

と傳八郎を伴れて廣間に出る、輝政はそれに控へて居つたが、そこへ酒井、井伊、本多、榊原の四人が傳八郎を伴れて出ました、三左衛門チロリと見て

「其の若者は傳八郎か、病中とのことであるが、格も稀代な病氣があるものぢや」

と笑ひました、病氣と云ひ立てた酒井忠次はきまりが惡い、時に三左衛門輝政が

「傳八郎の勇士なることは豫て聞き及びしが、見受けし處華奢なる骨格、父勝入齋も其方に討たれ聞や喜び居らん、次に酒井に問ふ、傳八郎當時の食祿は」

「八百石にござります」

「して、小牧山合戰の砌は」

「三百石にござります」

輝政それを聞くと、ヘラ／＼と落涙したが、やがてホッと吐息を漏らし、再び酒井忠次に對ひ

「我今度江戸城にまゐりしは婿御に對面いたす爲め、又二つには父信輝を討取りしこの永井に會ふも樂みにいたせしが輝政一世の誤りは是非に所望いたすべき一儀あり、それは餘の儀ならず、此の傳八郎を差引出として……」

それと聞いて四人は顔を見合せ、偖は永井を申し受け亡父の仇と斬つて捨てるかと驚いたが酒井はそれに遮り

「格別のお懇望を以つて傳八郎儀は助命の御沙汰これあらばやら我々より御願ひ仕る」

「コハ異な事を申される、傳八郎事我父信輝を討取りしは戰場の儀さすれば恨む筋なり、此の輝政の所望とは今日の引出として永井を一萬石の諸侯に取立て永く其の勇名を傳へたく此事御願いたせ」

と申した、聞いた四人と永井傳八郎は惜も意外と暫く無言、稍あつて酒井忠次が

「御所望の大身主人へ申し傳へるでござりませう」

と此事を家康公に申すと、

「流石は輝政恨みを捨て、傳八郎の武功を賞し彼を大身に取立て樂とは武士は斯くこそありたきもの」

と是で引出として傳八郎に一萬石の加増をした、永井は輝政を見て居る恩ひ、それより家康公は輝政に面會した、先は芽出度盛男の對面も濟み輝政は岡山へ歸りました、が、茲が池田侯の豪い所、三百石の小身者が信輝を討取つたために一萬石を領して大名の列に入つたとあらば信輝の偉大なる人物なる事が知れる、之ぞ亡父への孝行、信輝後永井傳八郎は、十五萬石を領し堂々たる諸侯となりました

小牧長久手合戰圖

■豐臣軍　凸徳川軍

犬山　小牧山　岩倉　長久手

徳川家康畫像

賀戰捷之新春併而謝皇軍之奮鬪

慶尙南道泗川郡泗川面平和洞四七番地 アサヒ自動車舖

慶尙南道泗川郡泗川面平和洞四七番地 アサヒ自動車舖

泗川警察署長 山口新

泗川邑內 共益精米所

泗川酒造株式會社 電話泗川七番

泗川郡公立學校長一同

泗川産業組合 電話三一番

泗川産業組合長 李池英

泗川邑內 信達谷清造

泗川邑內 金容煥精米所

泗川郡農會 電話二三番

道會議員 黃順柱

慶尙南道泗川 慶晋運輸株式會社 電話泗川九番

泗川面長 林文道 外職員一同

鷄林商事株式會社 平壤府

平壤府會議員 松尾六郞

平壤警察署

泗川穀物檢査所長 樽原凡夫

泗南竹川酒造場 出荷番

泗南面長 具光祖

泗川邑內 金守業精米所

泗南面竹川 李益秀精米所

南鮮合同電氣會社泗川出張所 主任 朴種煥

正東面協議員 崔洙鄕

正東面長 崔洛膽

泗川邑內 金恒吉精米所

大邱專賣局泗川販賣所長 高杢俊三

泗川邑內 千性泰精米所 電話三五番

慶南泗川 旅館料理 花家 電話一七番

泗川金融組合

平壤放送局

平壤穀物商組合

平壤府會議員 內田錄雄

平壤ゴム靴同業組合
金剛ゴム工業社 久田ゴム工業社 內德ゴム工業所 大同ゴム工業所 第一ゴム工業株式會社 鮮滿ゴム工業株式會社 正昌ゴム工業所 世昌ゴム工業社 同友物産社 平安ゴム工業株式會社 世大ゴム工業社 豐民ゴム工場 平元ゴム工業社

片倉殖産株式會社 平壤支部 平壤府濱町五
平南自動車商會 平壤府濱町五

東洋製絲株式會社 平壤工場

平安南道 道立平壤醫院

平壤府櫻町 西鮮唯一理想の大映畫殿堂 大劇 (每日三回) 電話二二二四・四四四四番 丸山理平

平壤吳服商組合

平壤酒造組合 組合長 田中周助

平壤府驛店里(?) 西鮮米油株式會社

社團法人 平壤土木建築協會

株式會社 平壤魚菜市場

平壤府新倉里 株式會社 箕城券番

平壤官公立 中等學校長會

平壤醫師會

平壤金融組合土曜會
平壤南金融組合 福家修 平壤北金融組合 直井芳五郞 大同金融組合 島三好 船橋里金融組合 小林友三郞

平壤材木商組合

平壤府船橋里 平南船運勞働組合 組合長 金貞浩 電一八一七・二二二五

平壤府船橋里 大同運輸株式會社

平壤地方專賣局

平壤府船橋里 朝鮮煉炭株式會社 平壤事務所

平壤府大和町 食糧雜貨卸 桑田商店

平壤辯護士會

平安南道 大同郡農會

朝鮮無煙炭株式會社 平壤鑛業所

平壤府竹典里一七〇番地 株式會社 和信平壤支店

鐵、銅、機械、鑛山、土木一 五六商會本店 平壤府南門通三十番地 電話二〇五六番・四六二一番・四三五九番 支店 滿洲國、ハルビン、新京、廣州(?)

平壤稅務監督局 食堂員一同

平壤券番

平壤商工會議所議員 西村太一

平壤府大和町 黃金堂 稻井吉 電話二二〇三・二六八〇番

平壤府會議員 林熊一

平壤刑務所 職員一同

平壤藥劑師會

平壤內地人旅館組合

平壤府會議員 岡元濟二

活版、オフセット版、石版 合資會社 脇坂印刷所 平壤府泉町四番地 電話四二二・四二二五番

平壤府泉町 藤野磯雄

松岡酒造場

平壤府新陽里一八二ノ四 平壤自動車工業會社

平壤菓子本家 久利屋號 本店 平壤府大和町 支店 京城府本町二丁目

金鵄サイダー 朝鮮飲料合資會社

鑛油 高橋礦油店 平壤出張所 平壤府濱町二

平壤興業株式會社 平壤府

鳳泉無煙炭礦株式會社 平壤出張所

朝日電機工業株式會社 本社 平壤府櫻町三十八番地 支店 京城府長谷川町一〇五

平壤府里門里五九 平南陸運株式會社

平壤水曜會

平壤府旭町拾貳番地 國産自動車工業株式會社 平壤出張所 所長 金津廸

平壤酒造組合聯合會 平壤清酒酒造組合

平壤無盡株式會社

平安南道高等官食堂

銘酒金千代釀造元 齋藤酒造合名會社 平壤府

平壤遞信分掌局 平壤郵便局

新式燒酎釀造元 平壤三和會 太平釀造株式會社 七星釀造株式會社 大同釀造株式會社 平壤釀造株式會社 販賣元 三井物産株式會社

西鮮中央鐵道株式會社

平壤鐘路 藥種貿易 製藥診療 法橋局 金爽應 電話長一九六五・三九六五 振替口座京城三八七四番

大日本製糖株式會社 朝鮮工場 平壤府船橋里

鐘淵紡績株式會社 平壤工場 平壤府船橋里

西鮮合同電氣株式會社 平壤府船橋里

賀戰捷之新春併而謝皇軍之奮闘